

発達障害大学生へのコミュニケーション支援 ～小集団ワークと個別面談における学生の語りを中心に～

西村 優紀美¹⁾²⁾・日下部 貴史²⁾・曾我 有可²⁾・佐藤 秀嗣²⁾

¹⁾ 富山大学保健管理センター

²⁾ 学生支援センター

Communication support for university students with developmental disorders
-Small group work and one-to-one student interviews-

Yukimi Nishimura¹⁾²⁾, Takashi Kusakabe²⁾,

Yuka Soga²⁾, Hidetsugu Sato²⁾

¹⁾Current issues in health care management at University of Toyama

²⁾Student Support Center

1. はじめに

富山大学教育・学生支援機構 学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室(以下、支援室)では、社会的コミュニケーションに困難さをもつ発達障害学生を対象に、コミュニケーション支援を行っている。その多くは個別面談による修学支援であるが、修学上の問題が減少するにつれ、自分自身の特性やコミュニケーションそのものを話題にすることが多くなり、コミュニケーションそのものを対象にした面談が進められていく。

支援室では2010年6月より、小集団によるコミュニケーション活動の場として「ランチ・ラボ」を開催し、継続的に運営してきた¹⁾。年度ごとに、新入生が加わったり、授業等の関係で参加できなくなったりと、メンバーの入れ替わりはあるが、安心できる環境の中でコミュニケーションを楽しむ場としての基本スタイルを維持している。活動当初から参加していた卒業生は、就職後も可能な日には参加し、近況報告もしながら活動に参加している。在学生にとって卒業生の参加は同じような特性を持ちながらも社会参加を果たしている先

輩に接する機会をもつことにもなっており、在学生のロールモデルとなっているという意味で意義深い。

また、不定期にコミュニケーション・ワークショップを開催している。この活動では絵カードや楽器など非言語的媒体を使って、多彩なコミュニケーション様式を体験し、人との関わりへの抵抗感を減らし、関わることで生まれるおもしろさを知ることを目的として行っている²⁾。

ここでは、発達障害学生のコミュニケーション支援を目的として行われた小集団活動を紹介し、それぞれの場面において、学生がどのような経験的学習を積み上げ、それぞれのコミュニケーションの在り方に影響を与えているかについて検討したい。

2. 小集団活動「ランチ・ラボ」

(1) 活動の目的と意義

小集団活動の位置づけについては、以下のよう
にまとめられる¹⁾。

①支援要請があり、個別面談を行っている発達障害の学生を対象とした自由参加の小集団活

動である。

- ②参加者が双方向のコミュニケーションを体験する、いわゆる雑談に近い場である。
- ③自分の思いや考えに関心を寄せてくれる他者との交流を通して、言語的コミュニケーションへの関心を惹起する。
- ④他者の考えを知り、自分の考えとは異なるさまざまな意見や解釈があることを知り、考え方の多様性を認める態度を養う。

コミュニケーション上の困難さのある学生が一堂に会し、緩やかな雰囲気の中で集うことによって、人と関わることへの不安が解消し、自分なりの関わり方に自信を持つことができる機会になって欲しいと考えた。なお、同世代の人との関わりに不安や緊張が強い学生には無理に勧めず、あくまでも学生本人の意思を尊重している。また、活動に参加した後には、個別面談で活動についての振り返りを行い、個別に学生の不安や疑問を解消していくように配慮している。

(2) 活動の概要

①実施日

定例会として、毎週水曜日 12:00～13:30 の 90 分間行う。(大学が長期休業期間はのぞく) 活動内容は、会食、ラボトーク、メタナラティブのシェアである。

②参加者

支援室で個別面談を行っている発達障害のある学生、支援者 4 名 (西村, 日下部, 曾我, 佐藤)

③場所

保健管理センター内支援室

④ラボトーク 活動の流れ

活動の主な流れを以下の通りである。

- (ア) 各自準備した昼食を食べながら雑談する。
- (イ) ラボトークを開始する (あらかじめテーマ(話題)をカードに書いて準備しておく)。
- (ウ) 一人がカードをめくり、各自そのテーマについて思いついたことを付箋に書く。
- (エ) テーマについて順番に話をし、付箋

をシートに貼る。

- (オ) 一人の話が終わったら、他の参加者は質問や感想、意見を言う。
- (カ) 同じテーマについて、全員が順に話をし、他の参加者は感想をシェアしあう。
- (キ) テーマを変えて、(ウ)～(オ)を数回繰り返す。
- (ク) 最後にシートを見ながら、全員で振り返り、メタナラティブをシェアする。

⑤配慮したこと

支援者は、自分も参加者の一人としてコミュニケーションを楽しみながらも、小集団活動が参加学生ひとりひとりにとってより有意義なものになるように、以下の点に配慮した。

- ①学生が主体的に参加するために、学生の希望や要望を随時、ラボトークの内容や方法に取り入れる。
- ②会話に苦手意識が強い学生が安心感をもって会話できるように、個人面談の中で語られるそれぞれの学生の興味をテーマに盛り込む。
- ③参加者全員が「話す機会」が与えられるようにする。
- ④学生同士の意見交換が成立するように、支援者が学生の発話を拾い、他の学生にも声をかけていく。
- ⑤支援者も一人の参加者として語るとともに、他者の発言に対して積極的に質問や意見を言ったり相槌をうったりして、学生にとって「話す・聞くモデル」となるように心がける。
- ⑥テーマを工夫し、学生が自分自身の特性や傾向に関心を向けるよう配慮する。

(3) 各回のテーマ

ラボを始めた当初は、参加学生が興味をもちそうな話題や話しやすい話題を選んだが、徐々に学生の意見を積極的に取り入れていくようにした。また、自ら話題を考える体験もしてほしいと考え、カードを引いた人がその場で話題を決めることができる「本日の当たり目」カードも用意した。

内容は自由で、具体的には、「夢の話」や「子どもの頃どんな遊びをしたか」、「自分自身の好きなところ」、「嫌な人と顔を合わせたらどうするか」などユニークな話題が提案された。さらに、「私」を語ることは、自分の特性に気づき、理解を深めるよい機会であると考え、自分を振り返ったり見つめたりするようなテーマも取り入れていくようにした。

もOK!

考えを変えず、貫き通すこともOK!

(今回は、自分が話したい話題だと話が止まらなくなりがちな学生Aと対象的な思いを言葉にできない学生Cのラボトークの変容を中心に紹介する)

<ラボトーク①>

【テーマ：勉強に集中できない。そんな時、何をして気分転換しますか?】

やりとりの一部を紹介する。

～前略～

A：ほくは、ありきたりだけどコーヒーを飲むとか、一度外に出て散歩とかかな。

支2：確かに、一度リセットする感じで、その場を離れるとかもいいね。

A：うん。でも、そんなことしても無理となったら、全く別の科目とかにすることもある。

支1：なるほど。あ～、私もなんだかわかるような気がします。Bさんは?

B：それに近いのかもかもしれません。気乗りしない感じの時はとりあえず5分だけやってみてのことが多いです。

支1：そうなんだ。Bさんは、5分やってみて、できそうとか判断したりするんですね。

A：そういう風にするのもあり!ですね。やってみようかな。

支1：確かに、お試でやってみて、自分にあうのはどれなのかりサーチするのもいいかも。

支2：なるほど!

一同：ああ～なるほどね～!(うなづく)。

支2：次は、Cさんかな?

C：開き直って、諦める。

支1：そういう時もあるよね。かなり難しい課題だともうダメ、いいやってなるし。

支2：Cさんは開き直った後って?どうなることが多い?寝るとか?ゲームするとか?その他に?

C：ふーん。

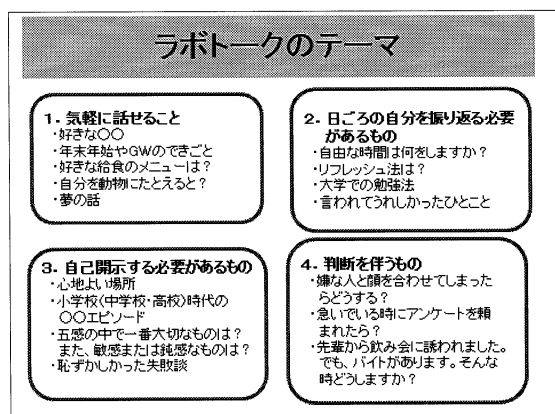


図1：テーマの分類

3. ランチ・ラボの実際

(1) ラボトーク

テーマは毎回5～6枚ほど準備する。内容は少しずつ変化させているが、同じテーマのカードをときどき使用する。同じテーマでもその時の状況や気分によって異なる発言になる場合もあり、そのこと自体、学生にとってはよい体験となる。

その場では、否定されない、自分のことを承認される、そして称賛されるという体験ができる。自分の考えをまとめて、それを伝えることがここでは大事となってくる。学生とともに支援者も学生数と同じくらい参加し、支援者の態度そのものが学生のモデルなるように活動をしている。

【ルール】 考えや考え方に対する評価をしない。

「言わない」「言えない」「考え中」もOK!

真似することもOK!

他者に触発されて、考えを変えること

支1：あきらめて、別のことをする。Bさんと
も似ているような？別の課題をするのと、
別のことをするというところは、似てい
るかも。

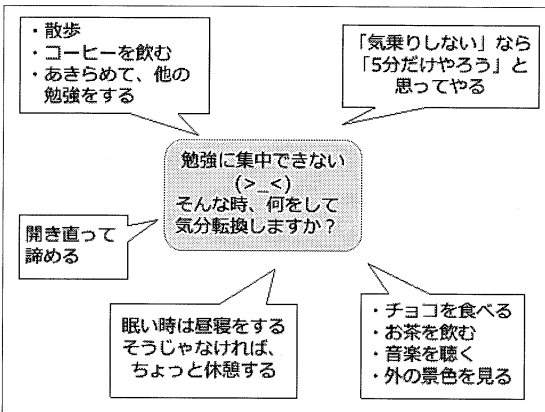
一同：そうかも。

支1：やっぱりそれぞれ気分転換のやり方がある
のですね。コーヒーとかお茶を飲んだり、
散歩をして体を動かして見たり、ちょっと
だけやって試してみてからだったり。

支2：この内容は、きっと、試験や課題が出てき
た時の役に立つかもしれないね。

支1：そうですね！

【ラボトーク①：それぞれの考え】



A、B、Cは理系学部の学生であり、自閉スペクトラム症の診断があり、Cは未診断の学生である。Aはラボに参加当初は、自分が話したい話題だと話が止まらなくなりがちな学生であった。Bは、コミュニケーションが苦手で、自分の意見はあるものの話すタイミングを計っているうちに話題が終わってしまうことが多い学生である。Cは、コミュニケーションの苦手さが顕著にみられ、思いを言葉にできず、支援者の一方的言葉がけに終始してしまいがちな学生であるが、昼食を食べながら雑談する時には、自分の興味があることを好んで話す。Aは参加当初は知識が豊富なこともあり、どんな話題でもすぐに自分の考えを言っていたが、回数を重ねるうちに、周りの様子をみながら、話しすぎるということがないように配慮したり、他

の参加者の話を聞いてから意見を言ったりするようになった。

Aとは対象的に、Cは当初「好きなことは寝ること」、「ゲームをする」、「何も言わない」という回答が多かったが、回数を重ねるうちに、他の参加者の話に耳を傾け、意見に頷いたり、他の参加者の意見が書かれたカードをのぞき込んだりするなど、積極的に参加する態度を見ることができた。

【ラボトーク①：まとめ】

自由な会話場面では、何を話してよいかわからない学生でも、ラボトークは次のような条件があることで、話すことへの抵抗感が少なくなっていると考えられる。まず、与えられたテーマがあるので、自ら話題を提供する必要がないという安心感がある。また、自分の考えをまとめるために付箋に書きこむ作業があり、考える時間を確保できる。また、参加者が順番に話すというルールがあり、どうしても考えが浮かばなかったら「パス（話さない）」を使ってもよい。さらには、たとえ話さなくてもだれからもそのことを否定されないことが、参加者全員の一致した了解となっており、この場に参加することへのハードルを下げていると思われる。

Aは話しすぎることなく、そばにいる支援者の会話を観察して、音量やうなずき、相槌などを適度に使い、言葉を選んで見られた。Bは話すタイミングをはかる必要がないことがわかり、マイペースで自分の意見を書き、自分の順番を待って発言する姿が見られた。Cは多くを語ることはないが、ウィットのとんだ一言で考えを書き、それを読み上げて、周囲の人の反応を見ようとする様子を見せていた。支援者がさらに詳しい情報が欲しくてAに質問するが、「ふーん」とつぶやくだけで、さらに詳しい情報を語ることはなかった。参加者が「たしかに、開き直ってあきらめることも大切な時があるよね」、「そう思っただけで気分転換になるときもありますね」というメタナラティブとしての語りをする、Cも同調するように数回、頷く様子がうかがえた。

<ラボトーク②>

【テーマ：人と話すとき、気をつけていることは何？】

やり取りを紹介する。

A：(カードを引く)人と話すとき、気をつけていることは何？

支1：気をつけていることか、何があるかな？

A：(すでに自分の意見を書いて)難しい質問ですね。でもこんな感じでもいいのかな？

支1：もう書いたの？まだ、出てこない…

支2：最近あったことで気をつけるようになったこととかでもいいのかな？

支1：そう！あった、あった。

A：書いたけど、これでいいのかな？まあ、これでいいかな？みんな書けた？

B：…ちょっと、まだ。

C (黙って、うつむいている)

支2：みんなの見てからでもいいしね。やっているうちに思い浮かぶかもしれないし。

支1：じゃ、はじめようか、Aさんからだね。

A：僕は、早口で相手が「ん？」って顔をした時は、気になるから焦って早口にならないように気を付けているかな。

支1：確かに、焦ると早口になるよね。私もそれあるなあ。(B:書き始める)次は、支2だね？

支2：最近、まあ以前からなんだけど、声が大きいと言われることが多くて、だから場に応じた声の大きさを変えるように気をつけていると思う。でも、時々、忘れて大きな声になっているみたい。

C：(Aや支2の意見の書かれたカードをのぞき込んでいる)

支1：僕も言われることがあるかも。気をつけたほうがいいのかも。僕と支2は、秘密の話できないですね。

支2：あら、秘密を持ってない2人だわ。(一同笑い)次はBさん？書けたかな？

B：気を付けているとかではないのですが…目を合わせたい。言葉使いを直したい。

支1：言葉使い、日本語って難しいよね。尊敬語とか謙譲語とかあって、大人なのに、今だに迷う。

～中略～

C：ある程度、相手に合わせる

支2：相手に合わせるって？どんな感じ？

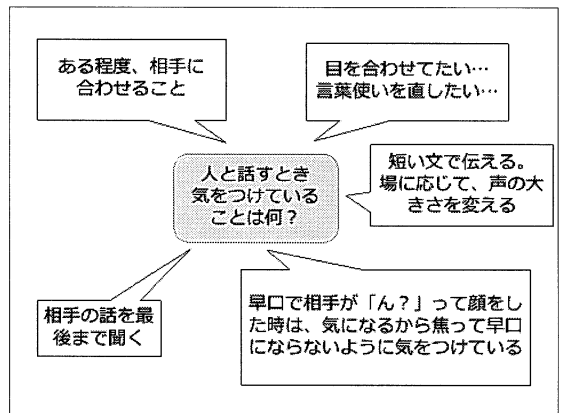
C：(周りの学生の様子をみて)相槌をうつとか、相手の方を見るときか。

A：まずはそこからみたいところありますよね。

一同：うなづく～笑い。

～後略～

【ラボトーク②：それぞれの考え】



Cは当初はどんなテーマでも、「なんでもいい」「無言」が多かったが、コミュニケーション・ワークショップ(絵や楽器、歌、ポエム等の素材をコミュニケーションツールとして活用した相互交流の場)で他の学生から「上手い。おもしろい。」と高い評価を受けたことがあり、ラボトーク②の頃から緊張感や不安感が減り、他の参加者の意見の書かれたカードをのぞき込み、頷いたり、「ほくもそう」と相槌をうったりすることが増えてきた。Cだけではなく、Aは支援者の会話の様子をみて、参加者全員に向かって声がけをする様子が見られた。BはAが声をかけると、短い言葉での反応ではあるが、即座に意思表示をしていた。

<ラボトーク③>

【テーマ：やってみたいアルバイトは？】

支1：(カードを引く) やってみたいアルバイトは？

支2：大学時代にしたかったことでもいいかな？

支1：それでもいいし、今でもいいんですよ！

A：今？副業ってやつですか？(一同：笑い)

支2：やってみたいこと、いろいろあるしなあ。

(中略)

支1：そろそろいいですかね？では、私から、飲食店のウェイトラー・ウェイトレスとか料理作り。そういうところでアルバイトすると、まかないとかでおいしい料理がタダで食べられたりするし。

一同：うなづく

支2：どんな飲食店だったら？って考えるな。私は中華料理屋さんかも。

A：僕は、イタリアンかな。Bさんは？

B：中華でしょうか。

支2：お～いっしょですね。

A：Cさんは？

C：ふーん。辛いのはだめ。

支1：私はなんでも、おいしいと感じるから、どんな料理でもいいかも。では、次はCさん？

C：寝具のモニター。

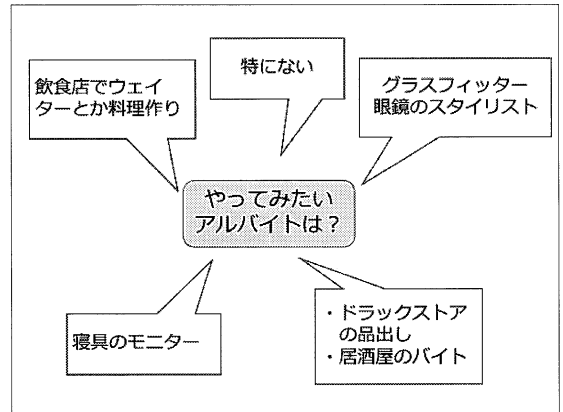
A：寝具のモニターって？

C：寝るの好きだし、寝やすい布団とかあるかもしれないし。

支2：へえ。Cさんにとって、寝やすい布団って？

C：ふかふかより、少し固め

【ラボトーク③：それぞれの考え】



ラボトーク③の頃になると、Aは支援者を「話す・聞く」というモデルとし、他の参加者へ適度な声かけができるようになった。AはCに対して、「C先輩」と声をかけるようになり、Cにとっては、それがとても心地よい言葉として受け止められたようだ。Cの変化として、Aが声をかけると、Aに向かって返答ができるようになり、学生同士のやり取りが成立するようになってきた。Aの発言にCが自ら反応するようになっていった様子を見て、学生同士だからこそ会話を楽しむことができるようになっていったプロセスの重要性を支援者として認識することができた。

【ラボトーク②・③のまとめ】

Cに関してまとめていきたい。ラボトーク①のころの個別面談は、支援者の対話においても、ラボの時と同様に「ふ～ん」「…(無言)」が多かったが、ラボトークを重ねるうちに個別面談でも短い語りではあるが返答することが多くなった。特に、ランチ・ラボについての話題では、「Aさんの意見…面白い。」「○○という考えは僕と似ている」等の発言が見られ、自分の考えと他者の意見を比較したり、同じだと認識したりする様子が見受けられた。

支援者との対話は現実的な事柄に終始しがちであるが、ランチ・ラボは同年代の仲間を含むフラットな関係の中で、非現実的なテーマや直面化されることがないテーマが取り上げられている。

つまり、自身の障害特性への困難さをいったん脇に置いて、自由に語る雰囲気があり、それぞれの価値観が尊重される枠組みがしっかり形作られている。ランチ・ラボに参加している学生にとって、安心・安全な枠の中で、お互いをエンパワーするグループダイナミクスが相互に良い影響を与えたと推測できる。

4. 一人の学生に焦点を当てて：事例紹介

小集団活動「ランチ・ラボ」に参加している学生Cに焦点を当てて、その変容について考察していきたい。

(1) メタナラティブ「私たちの物語」の作成

ランチ・ラボの活動を継続する中で、私たちは、発達障害のある人たちが自分の考えを表明し、他者の考えに関心を寄せる瞬間をいくつも見てきた。興味関心の幅の狭さが障害特性であるといわれているが、他者が強く関心を持っていることに関して知りたいという知的好奇心は大きい。そこで、自分自身の思いを表明し、他者の考えに耳を傾けることができたときに、参加者全員で、それぞれの考えを眺めるという時間を持つようにした。つまり、「私の物語」から参加者全員で承認しあった「私たちの物語」を創造できるのではないかと考えたのである。それを筆者らは、「メタナラティブの作成」と呼んだ。メタナラティブとは、多様なナラティブから唯一の答えを出すというのではなく、この場に共通している意見や考え方を見出してストーリー化し、一次元高い一貫性のあるナラティブを作ることをいう。

Cは、入学当初より授業に出られず、友人を作ることでもできずに孤立し、ご家族から支援要請を経て支援室の個別面談へとつながってきた学生である。現在も興味のある授業を受講するのみであるが、ランチ・ラボには毎週欠かさず参加している。継続して参加する中で、Cは短い言葉ではあるが自分の考えを話したり、他の参加者の質問に返答したりするようになっていった。最近では、他の参加者の発言に対して即座にコメントを言ったり、ウィットにとんだ一言を言ったりするよう

になり、Cの発言で参加者が思わず笑ってしまう場面もみられるようになった。

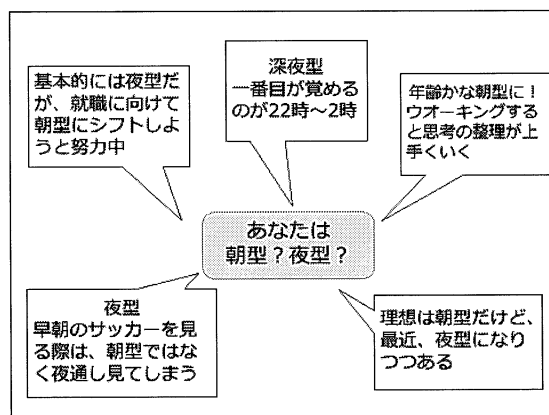
個別面談で感想を聞くと、Cは、「何度も同じテーマがでてくるから答えやすい。前と同じ意見じゃないけど、みんなの意見もいくつか覚えていてから、その時の気分で気持ちを書くことはできる。(笑みを浮かべながら) 当たり目のテーマもストックが10個ぐらいある。自分で考えたテーマだから、自分の意見もすぐにでる。他の人からも自分が出したテーマが書きやすいと言われるし(笑)」と語った。表現のたどたどしさはあるが、人とのコミュニケーションにより培われたCの成長を実感することができた。

(2) 「私たちの物語」から「私の物語」の生成

「ランチ・ラボ」の終了後、Cとの個別面談でラボトークで作成したシートを眺めながら、ラボトークのことを話題にした。全員でのメタナラティブの生成ではなく、その時に思いを言葉にできなかったCがみんなの意見をどのように感じ、自分なりに統合していくのかを知りたいと考えた。ラボトークで各自が書いた意見とCが作成したメタナラティブを紹介する。

テーマ：あなたは朝方？夜型？

< Cの語り >



Cさんとの個別面談にて

- このテーマに関しては、朝型、夜型と思った

けど、それ以外の型もあった。それは自分。目的のために変えたいと努力している人もいた。年齢、興味で型が決まるときもある。いろいろな理由で型が決まっていく。自分も理由があって、みんなと違う型になったが、また今とは違った理由ができて、自分も型の変更があるかもしれない。-

5. 小集団活動「コミュニケーション・ワークショップ」

(1) 活動内容

発達障害学生に対する多彩なコミュニケーションの場を提供することを目的に、絵画や楽器、歌、ポエム等の素材をコミュニケーションツールとして活用した相互交流の場として開催している。現在までに使用した素材としては、音の出るおもちゃ、オルフ楽器、顔マーク、絵本、自然素材等であり、なるべく身の回りにある素材を利用して、コミュニケーションの中で活用している。また、季節や地域にまつわるテーマを取り上げ、コミュニケーション・ワークとして活用する場合もある。

コミュニケーション・ワークにおける4つの観点としては、次の4つが挙げられる。

- ①参加者がそれぞれに存在をおびやかされることなく安心して交流できること
- ②それぞれの人が持つ多様な価値観が尊重される場であること
- ③活動後に振り返りを行い、参加者同士の感じ方、考え方をシェアすること
- ④すべての活動に役割交換の機会を持つこと

ここで紹介するコミュニケーション・ワークは、「秋」をテーマにした言葉遊びである。ここでは、「秋のポエム」を紹介する³⁾。

○活動①絵本「のはらうた」(工藤直子著)に出会う。

- ・絵本を手に取り、偶然開いたページの詩を朗読する。それぞれが順番に朗読し、感想を共有する。

○活動②「秋をイメージした連想」

- ・二人一組になり、「秋」という言葉から相互

に連想した単語をつないでいく。

○活動③詩人になったつもりで、自分のペンネームを考える。

- ・秋がテーマなので、秋にまつわるペンネームを考え、名刺に書いて自己紹介をする。
- ・ペンネームの由来を考えて、参加者に伝える。

○活動④「のはらうた」にある「どんぐり」と「あきのひ」という詩で楽しむ。

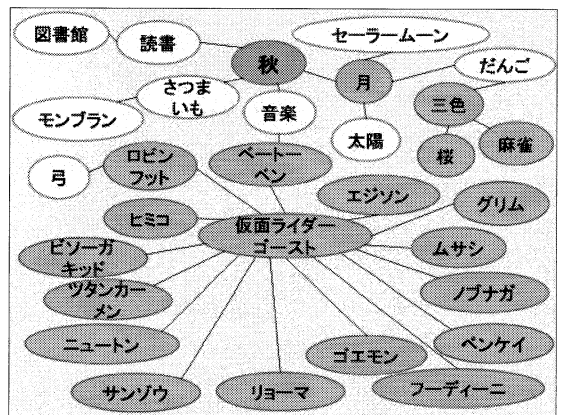
- ・朗読し、感想を共有する。
- ・「どんぐり」と「あきのひ」の一部を空欄にして、中に入る言葉をそれぞれが考える。
- ・自分で考えた詩を発表する。

○活動⑤秋にまつわる言葉を題名にして、詩を創作する。

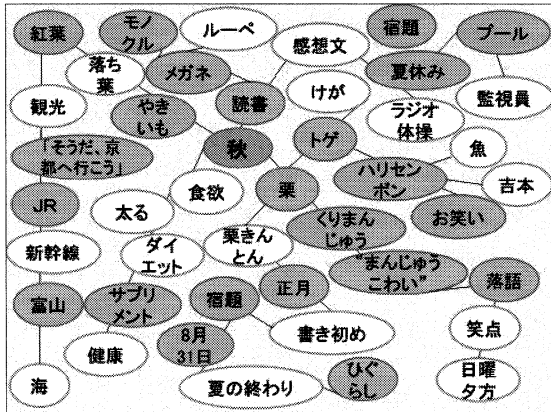
- ・自分の今の感情・感性をもとに題名を考える。
- ・搜索した詩を色紙に書き、朗読し、みんなでシェアする。

【秋をイメージした連想】

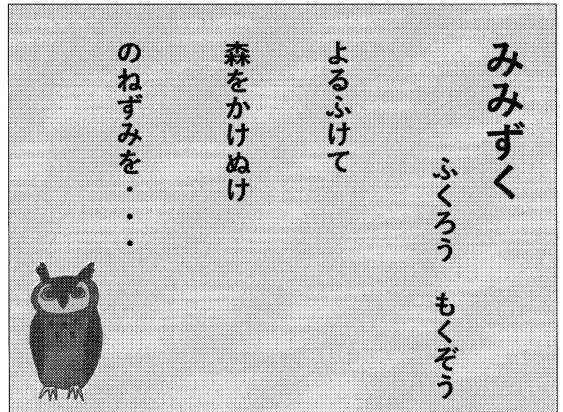
活動②：ペア活動 (Cと支援者)



活動②：ペア活動（Aと支援者）

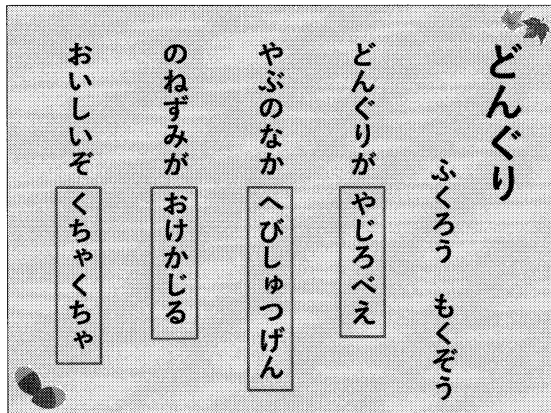


活動⑤：Cの創作ポエム



ふくろう もくぞう「みみずく」

活動④：Cの作品：四角の部分で考えた。



ふくろうもくぞう（Cのペンネーム）の作品

(2) 事例の紹介

思いをすぐ言葉にできないCは、秋をイメージする際、支援者が先に音楽、読書と書き始めると、得意の音楽から次々とイメージをひろげ、支援者より多くの言葉を書き込んだ。

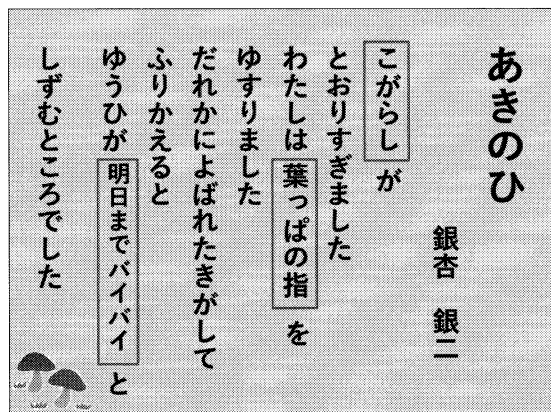
「音楽、ベートーベン、仮面ライダーゴースト…エジソン、ロビンフット…」

支援者が「ベートーベンから仮面ライダー？」と質問すると、即座に「ストーリーに英雄とか偉人が出てくる。歴史好きだし(笑)」と答え、次から次へと言葉があふれてきた。以前、行われたオルフ楽器を利用したコミュニケーション・ワークショップでも他の参加者から賞賛をあげていて、音楽にまつわる話題には即興でも対応でき、その良さがうまく表現された素晴らしい作品となった。

また、言葉遊びが好きなAは、支援者が一つの言葉を書くと、それにまつわる知識をその場で話し、そこから連想される言葉を2～3つ書いていた。話すことが好きで、ランチラボでも他の参加者の言葉を駄洒落に変えて話す等、得意な言葉遊びを存分に発揮した作品となった。

コミュニケーション・ワークショップに参加した学生は、「ポエム作りの活動は、最初は言葉がまったく思い浮かばなかったけど、周りを見たら書けた、楽しかった」、「経験したことや見た

活動④：Aの作品：四角の部分で考えた。



銀杏 銀二（Aのペンネーム）の作品

ことからイメージができた、少し自信がついた」、「自分から進んで活動できて本当にうれしかった」、「楽器を使った活動では、リズムを合わせるのが苦手だというコンプレックスがあったが、やっているうちにそういった意識は薄くなった」などの感想を語ってくれた。

通常の個別面談では扱われることのない「非言語的コミュニケーション・ワーク」により、他者と共感すること、他者と響きあうことを文字通り体験することができ、さらに、遊びの要素が加味されることで、自分なりの工夫が活かされ、コミュニケーションを楽しんでいる様子が見られた。

6. まとめ

ランチ・ラボは、「同年齢の話す仲間が欲しい」という学生の願いを実現するために始めた小集団グループ活動であった。一定の成果が得られたのちは、同世代の仲間と話す機会が少なく、コミュニケーションの機会が少ない学生に対して、支援の一環として活動に誘うようになった。参加当初はほとんど話さなかった学生が、毎週一回ここに参加することによって、少しずつ変化していった¹⁾。

参加学生は支援者や他の学生の振る舞いや言葉にとっても敏感であった。たとえば、ある学生が新しい靴をはいてきた時、一緒に参加していた別の学生が、ラボ後の個人面談で「〇〇さん、スニーカーが新しくなっていた。僕も…そろそろ買おうかな」という感想を言う。また、支援者同士が雑談の中で失敗した話をした際には、食事を取っていたある学生が「そんなに落ち込まないでくださいよ」と声をかけてくれ、「そんなこと誰にでもありますよ」と慰めてくれることがあった。それぞれ自然な会話では個人差があるものの、他者への関心度が低いように見える学生も、ラボトークの場を共有する仲間として、互いに影響し合って成長していったように思う。

コミュニケーション・ワークショップは、「私たちが一緒に豊かなコミュニケーションの場を創っている」という活動を明確に表してくれる²⁾。

それぞれの解釈の違いそのものが尊重されるので、一人ひとりが持っている個性・特性が常にポジティブに受け止められ、自分自身のオリジナリティが尊重される機会となり、自分はここにおいていいという自己存在感を実感できるコミュニケーションの場となっていた。

どちらの活動も、支援者は学生に対して指示や誘導を行わないのが原則である。たとえば、あらかじめ支援者が「正解」を持っていて、支援者が期待する回答を求めるようなことはしていない。つまり、ソーシャル・スキルトレーニングとしてのアプローチはしていないにもかかわらず、学生たちは自分の意見を語り、互いの意見を聞き合い、良いところは積極的に取り込もうという態度を身に着けていくことができた。

支援者は、発達障害のある人へのコミュニケーション支援とは、「良質で豊かなコミュニケーションの場を提供すること」にあり、そのような良質な関係性の中で、彼らは良いモデルを取り込み、自分自身に染み込ませていくものであると確信している。

<文献>

- 1) 水野薫、西村優紀美 (2011) 発達障害大学生への小集団による心理教育的アプローチ. 学園の臨床研究,10,51-59.
- 2) 西村優紀美 (2010) 心理教育的アプローチ. 斎藤清二, 西村優紀美, 吉永崇史 (著) 発達障害学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント—. 金剛出版, pp 140-201.
- 3) 西村優紀美、曾我有可 (2018) 修学支援における意思表示支援とは. 日本学生支援機構 障害学生支援専門テーマ別セミナー【発達障害就労支援】分科会1 話題提供. 東京.